

● 高澤良一 第四句集 ぱらりとせ

● 秋

カナダ行

もみづれるカナダを机上プランかな

カナディアン・ロッキーの秋見に来たり

牡蠣食うて夜風にあたるダウンタウン

メイプルのもみぢ押し葉にして機内

カナディアン・ロッキーの西日赤シャツに

クルーズ船バンクーバーの夕焼け追ひ

滝飛沫ダグラス樅フエを育めり

インディアン滝を称えてタカカウと

*タカカウは素晴らしいの意

隣席の袴着袴こそつかず

赤い羽根赤信号と向き合うて

水張りしコップに空地の赤のまま

人間に雲脂といふもの秋立ちて

金澤文庫

忍性の赤鼻に秋立ちにけり

書きあぐねをれば秋扇手にとりて

秋雨に煙草臭さを抜いてをり

秋蟬のひりりと榧を離れざる

秋空に鳶の打ったる感嘆符

秋ついでり紛々天の篩より

秋日差し湯釜水釜涸釜に

小刻みに蠅の向き変ふ秋日中

岳樺幹の阿修羅に秋烈日

朝顔の色はと見れば在り来たり

道三の国の蝗の閻魔顔

稻妻の夜討ちの如く廊を馳せ

稻妻の銀の眼を沖合に

ふかし諸あてがはれをり留守居役

諸蔓を衾ちちろの鳴けるなり

諸洗懐旧 隣家のおばさんふ笠置シヅ子のブギウギに
雨脚のぴよんぴよん車前草伝ひなる
後後のことを芋殻を焚きながら
炎明りに雨粒見ゆる芋殻焚
芋殻折るひびきを芋殻を折る前に
燃えのこる芋殻にも炎を廻らしむ
芒原目がみえてきて女郎花
女郎花一息おいて手折りけり
いちばんの庭の古株瘦万年青
貝割菜整列足踏みせるごとし
木守柿のやうやうおちて閑日月
蠟螂の翅にも山の露降りて
しやれてをり縦縞入りの烏瓜
烏瓜残る一つも飛び去んぬ
烏瓜ぴりつと肌を刺す大気
きちかうの記憶を辿る容して
買手つく菊の苗より虻立たせ
五つ色もあるうか垣の乱れ菊
嵯峨菊は火花打ち出す燧石ひょうち
白菊の朝臣あそん黄菊の臣おみ・連むらじ
滑茸ののらりくらりをかっ込めり
ぽっぽつと日の差すひよどりじょうごの實
朝霧三浦妃代さん逝くの汝を訪ひ声を掛くるならむ
霧うすれ弟子屈町営飛行場
きりぎりすびくりと動く水平線
ぎんなんのへちやと土打つ音すなり
草の絮飛びそむ空の雲母きんぼ刷ずりに
栗飯一家よく喋ること喋ること
黄落の骨うづむなら西林寺

ブナ鮭の水かったるく打ちにけり
山茶花に大きく物の割れる音
さざんかの目を泣きはらすやうな花
猪鍋のもう煮えたらうまだ煮えぬ
猪撃ちに取り憑かれたる脂顔
猪撃ちの口鉄砲をつづけをり
猪撃ちの黙殺に遇ふ峠道
地藏盆実の付いてゐる櫛束
なむあみだ躰にたむる地藏盆
ずず玉の天つ日返す地藏盆
川地藏供養稻の香むせるなか
醤油瓶醤油尽きかけ終戦日
ずず玉のつるんつるんにかえりゃんせ
四時廻り白粉花フォーオクロツク咲き出せり
新走りふふみ日向に出づおもひ
半歩ほど入りて穂芒手折りけり
芒分け又芒分けいっぽん道
背黒鵲鴿波に驚きと走り
関東縦断台風スピードアップせり
月氏国おもへと月に琵琶弾ず
もうけもの雨後の望月正面に
しっかりと蛇口締め来て月の座へ
家々に良夜迎へる窓のあり
ダマスカスナイフの月が椰子の横
一疋のねりぎぬ月の千曲川
燈火親し楷の木の本展ぐれば
燈火親し流石てふ字に目を止めて
つと廻り込んで止まれる川蜻蛉
赤チンを吹いて乾かすアキアカネ

時国家ぐんと高むや鬼やんま
祖師堂前蜻蛉のつるむ音すなり
また顔にあたる狼煙のあきつかな
灯心蜻蛉の尻尾ずんずん目の前を
ななかまど白根百度霧流れ
浜っ子のべえべえ言葉海羸廻し
焚莱山房庭前の萩走り咲き
八月も終りに降れる雨に斑
風立てる其色月の橋わたり
素破こそとばかりバツタの跳べる貌
おんぶさるバツタの脚の懸け具合
葉っぱに貌ぶっつけ跳べるバツタあり
蕎麦の花ぴくんぴくんと雨受けて
花煙草十分に葉の大きかり
花野行足弱組に加はれり
もちまへの力出しきる隼人瓜
はららごに伍してかがよふ飯の粒
蝸の畳みかけ鳴く閉園どき
蝸聞き平家統領謫居の家
藤の実の如く垂れなば涼しからむ
ひろがれり葡萄の味の交響樂
西施・虞姫芙蓉の三十二相かな
朝の気をはらめる芙蓉雨外れし
夕されば芙蓉けじめをつけるごと
白芙蓉閉づと云ふよりポシヤリけり
分旦の天然のいろ出し洩る
来宅の途次の糸瓜の棚のこと
がたぴしとべつたら市の屋台組む
鯉飛んで深川鼠の川面かな

盆波のうねり座頭鯨の背のやうに
じよんがらのででんと盆波くつがへる
盆波のあとからあとから遠江
ヤツチクを郡上生まれの娘っこ
若衆のゲンゲンバラバラ夜っぴいて
阿波踊りそこは素通りぞろぞろ連
よしこのに腕まくりしてうづうづ連
盆花摘み川原歩きも朝のうち
曼珠沙華念彼観音力以て
長雨に火力衰ふ曼珠沙華
彼岸花彼岸の色を薄めけり
日表に痘痕の零余子法師かな
白木槿とびきり暑き日とならむ
虫の音のほろろばったり雨閉す
虫の夜のああ利尿剂利きにけり
繰返す蟲は一病息災と
木犀のかをる出鼻を雨叩き
木犀の花の付き方はと見れば
木犀に頭すつきりする机辺
ひとしきり初鵬聞いて座につける
言葉かけ合ひ楷樹もみぢの愛好家
いくらかは山吹黄葉してゐたり
粧はず俵藤田の唐沢山
一念にかられて来たる敗荷
敵はない人の句を誦す夜長なり
めいめいの部屋に引きとる夜の長し
りんどうのほとり真っ黒火山弾
りんどうに霧のわいわい押し寄せぬ
蔓荔枝サタンに魔法かけられし

ひやっこき雨に見舞はれ蔓荔枝
吾亦紅指で突くごと風の出て